

極上御曹司は幼馴染みを

十年越しの執着愛で搦め捕る

序章

梅雨明け前から厳しい暑さが続く、七月上旬。

シティホテルのデラックススイートルームには、湿り気を帯びた熱気が充満していた。煌々と灯るシャンデリアの光が、手足を絡め合う二人の裸体を照らす。

本来なら愛する人——二歳年上の幼馴染み、國東慶斗くにとうけいとに求められ、女性の「初めて」を捧げられる幸せで胸がいっぱいのはずなのに、本間凛乃ほんま凛乃は恐怖で身体がふるふると震えていた。

涙が次から次にあふれて、柔らかな羽毛枕に染みていく。

大学一年生になった凛乃と過ごす初めての夜を、慶斗が素敵なものにしようとしてくれたのに、まさか秘唇が裂けそうなほどの痛みに耐えられなくなるなんて思ってもみなかった。

「大丈夫、もう少しこのままで……。そのうち気持ちよくなるから」

慶斗が甘く囁き、凛乃の頬や顎に口づけをしては身体の力が抜けるように心を砕いてくれる。

でも、やはり我慢できず、凛乃は自分に覆いかぶさる慶斗の腕に爪を立てた。

「ダメ！ お願ひ、抜いて……！」

「凛乃、時間が経てば——」

涙目で必死に訴える凜乃に、慶斗が苦悶の表情で何かを言いかけるが、途中で口を閉じた。そしてぎこちなく口角を上げて、凜乃のこめかみに唇を落とす。

「わかった。凜乃が辛いなら、これ以上は無理をさせない。安心して」
そう言って、静かに腰を引いていく。

皮膚が引つ張られる感覚に喉の奥が詰まりながらも、凜乃を苦しめた痛みを伴う圧迫感から一気に解放されると、ゆつくりと息を吐き出した。

しかし、慶斗の口から漏れた遣る瀬ない息遣いと、大きく軋んだスプリング音によって、再び凜乃は緊張する。

凜乃は慶斗の全てを受け入れられなかった悔しさで、唇を噛み締めた。

慶斗に背を向けて身を縮こまらせていると、不意に彼の腕が回された。懐に引き寄せられ、頭にチュツとキスを落とされる。

まるで凜乃を慰めるかのように……

慶斗は昔からとても優しくかった。悲しむ凜乃を見るたび、必ず慈しみを込めて凜乃の頭を撫でくれた。

今もそうだ。辛いのは途中で止められた慶斗の方なのに、自分の欲望より凜乃の気持ちを優先している。だからこそ凜乃は、心が締め付けられるほど苦しかった。

凜乃がシーツを握り締めた時、慶斗は静かに凜乃の肩口に唇を落とした。

「大丈夫、初めてで動揺しただけだ。次は今日みたいな思いはさせない。約束する」

慶斗は凜乃の素肌に唇を這わせて、大きな手で腹部を撫で上げた。そのまま上へと滑らせると、中学生の時から急に膨らみ、今ではEカップへと成長した乳房を包み込んだ。

「……っ」

「今はこれで充分。ここに触れられるのは俺だけだから」

慶斗の優しい手つきに、凜乃の口から甘い息が漏れる。違和感が残る双脚の付け根がびくびくと戦慄き始めた。柔らかい乳白色の真ん中で色づく頂も、慶斗の指先が掠めるだけで硬くなり、下腹部の深奥に熱が集中していく。

「慶斗……、わたし……っあ」

視界が霞むのを感じて、凜乃は思わず瞼を閉じる。

「いつもみたいに触るだけだ。……今夜は肩の力を抜いて、俺に身を委ねて」

瞬間、慶斗の愛を受け入れられなかった数分前のことを思い出した。凜乃は居た堪れなくなり、上掛けで裸体を隠して体を起こす。

「わたし、その……、ごめんなさい」

「凜乃？ どうした？」

慶斗が心配そうに訊ねてくる。しかし何も答えられなかった。

二人の間に漂う空気が少しずつ冷えてきたのを感じた時、突然音が鳴り響いた。ベッドサイドに置いていた凜乃のスマートフォンだ。

凜乃は気まずい状況から逃れたいあまり、慌ててスマートフォンを掴んだ。

「えっ……？」

お父さん!? ——そう思った時には遅く、通話ボタンを押してしまった。しかも急いだせいで、スピーカーに触れたまま指を滑らせてしまう。

『凜乃? お父さんだ』

「う、うん」

部屋に響く父の声に、凜乃はパニックになりながらも返事をした。こんな格好で親と話しているのだから当然だ。しかも隣には裸体の慶斗までいる。親に恋人との秘め事を見られてしまったかのようなばつの悪さを覚えて、凜乃は次から次に訊ねてくる父親に生返事を繰り返す。

しかし電話を切る方が先だと思い直し、凜乃は「あの、お父さん」と話を遮った。

『すまんすまん! 話が長くなってしまったな。実は電話をしたのは、お前の留学の件だ』
りゅ、留学……!?

凜乃は息が止まりそうになる。まだ慶斗に話していない件を、父が口にしたからだ。

凜乃の手から力が抜け、スマートフォンが滑り落ちた。

『今朝、TOEFLのスコアレポートを置いていく約束だったのに、お母さんに渡さなかっただろう。どこにある?』

凜乃は心臓が激しく鼓動するのを感じながら、震える手でスマートフォンを拾い上げた。

「それは、帰ってから——」

会話を終わらせようとする凜乃に、父が呆れた声を漏らした。

『帰りは明日の夜なんだろう? 月末には渡米するから、早めに語学学校の手続きを——』

「わかってる! ……だけど、今は説明できないから明日にして!」

そう言っただけで凜乃は電話を切り、マナーモードに切り替えた。

こうしてこれ以上暴露される心配はなくなったが、全然安堵などできなかった。

黙ったままにいる慶斗が怖い……!

床に針を落とした音さえも聞こえるぐらい、どんどん静けさを増す。それに合わせて、凜乃の身体も強張っていった。先ほど慶斗を拒んだ時よりも、息がしづらくなるほどに。

凜乃は堪らず顔を強く閉じた。

「凜乃……、おじさんの話はどういう意味だ? 月末には渡米? ……留学?」

慶斗の声音が低く響き、凜乃はビクッと震え上がる。これまで一度も聞いたことがない張り詰めた声だったからだ。

この話題には無視を決め込みたかったが、慶斗が逃がしてくれるはずはない。

凜乃は腹を括ると浅く息を吸い込み、慎重に振り向いた。

間近でこちらを覗き込む慶斗の瞳には、動揺の色が浮かんでいた。そこには、怒りに似た炎も揺らめいている。

慶斗の激情を目の当たりにし、凜乃の震えが一層大きくなった。

「留学するには、まずは学生ビザであるF-1が必要だが、すぐには手に入らない。前もって予約を入れて、面接を受けなければ」

慶斗は口に出しながら、自分で整理していく。

目まぐるしく変わる慶斗の表情から読み取れるのは、彼が自力で答えを導き出すのも時間の問題だということ。

凜乃が唇を引き結んだ時、慶斗は大きく息を吸い込んだ。

「つまり何ヶ月も前から留学の準備をしていた？ 何故？ 凜乃、きちんと説明してくれ！」

慶斗から伝わる、裏切られたという思い。

それは、慶斗が凜乃を一途に愛してくれているから……

凜乃の目の奥がジーンとしてきた。さらに涙腺が緩み、彼の顔の輪郭がボヤけていく。凜乃が咄さし顔を背けると、あふれ出た涙がベッドに落ちた。

瞬間、腕を取られて慶斗の方へ引き寄せられた。凜乃は片手をベッドに突いて倒れそうになるのを防ぐが、すぐに顎を掴まれて慶斗の方へと向かされる。

「俺は凜乃の望みなら、なんでも叶えてきた。昔からそうだっただろ？」

慶斗の言うとおりだ。

恋人同士になる前は、実の妹に対するように凜乃を助け、守り、時に導いてくれた。想いを伝え合ったあとも変わらず、凜乃の不安や悩みに寄り添ってくれた。何より深い愛情で包み込んでくれた。

今もそうだ。凜乃が初めての痛みで嫌がったら、慶斗は怒りもせずに退いてくれた。

慶斗はこれまで、凜乃が嫌がる真似は一度もしたことがない。

凜乃は静かに頷いた。

「それがわかっていながら、どうして事前に相談しなかった？ もし言ってくれたら、凜乃の留学に合わせて、俺も一緒に渡米できたはずだ」

その言葉に、凜乃は愕然とした。

今回凜乃が慶斗に黙って留学することになったのは、自分の意思ではない。彼の父である國東当主の命令だ。

國東家——明治時代から続く財閥で、通称「東家」と呼ばれる名家。現在は情報通信電気機器産業をまとめるグループ企業として、数多くの事業を展開している。慶斗はその跡取りで、大学生ながらいろいろな重荷を背負っていた。

一般家庭で育った凜乃が、御曹司の幼馴染みとして受け入れられた理由は、高祖父の代まで遡る。高祖父の善行によって、代々國東家と縁を繋げた。今の本間家があるのは、全て高祖父と、高祖父を重用してくれた國東家のおかげだ。

そういう理由から、本間家は國東家には逆らえない。

國東当主自ら「恋愛を自ら清算して留学してきなさい」と命令されれば、凜乃は承諾するしかなかった。その際、当主に「凜乃しか目に入らない息子の性根を叩き直したい」とも言われた。

正直、慶斗の世界は凜乃を中心に回っていないかと思っていた。でも今の彼の言葉で、凜乃は國東当主が言ったことは正しかったと気付かされた。

ああ、なんてこと！ このままではいけない。このままでは……！

たとえ慶斗に別れを告げても、心のどこかで彼と繋がれたらと思っていた。愛していると態度で示すために、我が身を捧げようと考えた。

でもそれは誤魔化しであり、自己満足だ。全然慶斗のことを考えていない。國東家の跡継ぎとして一番大事な時期に、凜乃の件で煩わせてはいけないうとどうしてわからなかったのだろうか。

それも愛なのに……

もちろん、愛する人との別れは胸が引き裂かれるほど辛い。でもお互いに成長すれば、いつかきつと二人の人生は交わる。

そうであると信じたい……！

凜乃はあふれ出る涙を振り払うと、顎を上げて慶斗と目を合わせた。

「慶斗。わたしが留学の件を黙っていたのは、理由があったから」

「理由？」

慶斗の目つきが鋭くなる。その面差しは國東当主と瓜二つだ。まるで國東当主から命令を受けた時みたいに、不安に押し潰されそうになる。

凜乃は込み上げてくる生唾を無理やり呑み込み、恐る恐る頷いた。

「父から國東グループのL A支社に転勤になったと聞かされたあと、家族皆で渡米すると決めたの」

「おじさんが転勤？ たとえそうだとしても、俺に一言あっていいはずだ。付き合っているのに、

勝手に決めるなんて……なんとも思わなかったのか？」

慶斗が強い口調で言い放つ。

凜乃は俯き、小さく首を横に振った。

「だったら——」

「別れようと思ったから」

わなわなと唇が震えるが、凜乃は喉の奥から声を振り絞って告げた。

國東当主の命令とはいえ、最終的には自分で“別れ”を決めた。なのに、まだ覚悟が足らなかったのか、心臓に手で握り潰されたような痛みが走る。喉の氣道が狭まり、上手く空気を吸えない。

慶斗は血の氣を失った表情で、凜乃を凝視している。

「わ、別れたい……？」

小声で訊ね返す慶斗に、凜乃はぎこちなく頷く。

「留学するからには、勉強に集中したいの」

そこまで言った直後、凜乃の背筋に冷たいものが走り抜けていく。慶斗が冷酷な光を宿した双眸を向けたためだ。

「なるほどね……。何ヶ月も前から、俺を捨てるつもりでいたんだな？」

さらに無情な声で言われ、胃が引き絞られるように痛くなる。

凜乃は迫り上がってくる酸っぱいものを、何度も呑み込んだ。

「別れるつもりでいたのなら、どうして今日……俺に抱かれようと思った？」

「それ、は——」

「餞別？ 処女ぐらいいは俺に捧げてもいいかって？ ……っ！」

慶斗は勝手に答えを導き出し、悪態を吐いて顔を背けた。

「違っ——」

「そんな気持ちで俺に身を委ねていたとは……。だったら、最初から拒んでほしかった！ 誰が別れたがつている女の身体を欲しがる？ 好きな女だから優しくして、繋がりたいと思うんだろ？」

慶斗の悲痛な訴えは、凜乃の心を揺さぶった。凜乃も同じ気持ちだったからだ。

好きな人とでなければ、誰が身を捧げたいと思うのか。しかし、それをしようとした結果がこれだ。

こうなったのは全てわたしのせい。わかってるけど、慶斗への愛だけは疑わないで！ ——そう心の中で訴えるが、彼はこちらを見向きもせずベッドの端へ移動し、立ち上がった。

筋肉がついた背中、細い腰、そして引き締まった臀部が、凜乃の目に飛び込んでくる。凜乃が慶斗の逞しい体躯に目を奪われている間に、彼は椅子に置いていた服を掴んだ。

「別れないなら別れよう。俺は……俺を裏切る女などいない」

ズボンとTシャツを身に着け、薄手のジャケットを羽織った慶斗は、バッグを手にドアの方へ歩き出した。

「け、けい……と！」

声が掠れても、凜乃は慶斗の方へ手を伸ばす。しかしそれは虚しく空回り、静かにドアが閉まる

音だけが悲しげに部屋に響いた。

「……っう」

慶斗を失望させ、彼の心から“愛する人”を消してしまった事実が胸が張り裂けそうになる。

凜乃は感情が迸るまま泣き続けた。

どれほど慶斗を愛しているか、どれほど一緒にいたいと願っているか、言葉では語り尽くせない思いが、涙となってあふれていく。

そんな凜乃の心を代弁するように、いつの間にか降り出した雨が、シティホテルの窓を激しく叩きつけていたのだった。

第一章

梅雨明けして本格的な夏を迎えた、七月下旬。

凧乃は久しぶりに日本の夏の蒸し暑さを感じながら、暗闇の中で輝くネオンに目を細めた。

「あれから、ちょうど十年になるのね……」

アメリカに渡航したのが、大学一年の夏。

國東当主に言われたとおり勉学に励み、無事大学を卒業。その後は、そこで培った能力を活かすため、日本にも関わりがある翻訳会社に就職した。

途中で父の転勤が決まり、両親だけが帰国。八歳年下の弟は帰国子女推薦枠で日本の大学を受験するため、高校卒業までの一年間は凧乃と暮らし、一人で日本に戻った。

凧乃はアメリカに残ったが、日本支社への転勤が決まり、こうして今に至っている。

「えっと……こっちな？」

凧乃は、新宿駅からやや離れた路地に入った。実は帰国して数週間経つものの、仕事が忙しくてなかなか家族との時間が取れなかった。すると痺れを切らした両親が動き、凧乃の日程に合わせてイタリアンレストランを予約したと伝えてきた。遅ればせながら、凧乃の誕生日を家族で祝いたいらしい。

凧乃は家族の深い愛情に幸せを感じながら周囲を見回すと、ライトに照らされて浮かび上がるヨーロッパ風の白亜の洋館が目に見え込んだ。

「ここね」

なんて目を引く建物だろう。外から、店内の煌々と輝くシャンデリアも見える。

凧乃は緩やかに巻いたセミロングの髪を後ろに払うと、ラッフルスリーブのカットソーにロングスカートを合わせた自分の服をチェックする。心の中で「よし！」と気合を入れてドアを開けた。すぐにブラックスーツ姿の男性スタッフがカウンターから出てきた。

「いらつしやいませ。お待ち合わせでしょうか」

凧乃が名乗ると、ホールの一隅にあるテーブルに案内してくれた。既に両親と弟の凧^{りき}己が着席し、凧乃の到着を待っている。

「凧乃！ さあ、座って」

五十代にしてはすらりとした体形の母が椅子を示す。かすかに白髪が目立つようになったが体格のいい父と、アイドル顔負けの容姿を持つ弟が笑顔で出迎えてくれた。

「ビデオ通話では話しても、こうして家族が一堂に会するのは久しぶりだな。今夜は美味しいものを食べていろいろな話をしよう」

父がそう言ったあと、ホールスタッフが現れ、アペリティーヴオのस्पモーニがテーブルに置かれた。カンパリにグレイプフルーツジュース、トニックウォーターをまぜた、甘酸っぱくてすっきりとした食前酒だ。車の運転をする凧己だけはノンアルコールだが、皆と同じグラスにジュースが

注がれている。

「凜乃、誕生日おめでとう！」

父に倣って、皆でグラスを掲げた。そして一口含む。

「んんんっ、美味しい」

凜乃は感嘆した。

男女ともに人気があるのも頷ける。とても飲みやすく、並べられたアンティパストの盛り合わせとの組み合わせは抜群だ。

凜乃はマグロのタルタル風ブルスケッタ、トマトソースとチーズが入ったパンツエロツティ、アンチョビとチーズ、バジルをナスで挟んで揚げたコトレッタを次々に食べ、家族と会話を楽しむ。海外転勤を経たあとの父は、國東グループ本社の経営戦略課の課長となり、着々と出世街道を進んでいるらしい。

どういう仕事をしているのかは知らないが、凜乃同様忙しく、出張も多いと話してくれた。それでありながら、仕事の疲れなどは顔に出していない。充実した時間を過ごしているのだろう。

「姉ちゃん。どうして俺らのマンションで暮らさないの？　うちから出勤すればいいのに。姉ちゃんの部屋もあるんだし」

姉弟で二人暮らしをした経験があるせいか、凜己は大学生になった今でもお姉ちゃん子だ。何度、こうして一緒に住みたいと言われたか。

凜乃は頬を緩めると、隣に座る凜己に手を伸ばし、彼の額を指で弾いた。

「出勤時間がまちまちだからって言ったでしょ？　帰宅が早い時もあれば遅い時もあるから、一緒に暮らしたらお母さんがしんどくなっちゃう」

「あら、お母さんのせいにしないで。凜乃は一人暮らしに慣れたから、家に戻りたくないだけでしょ？」

わざとらしく拗ねる母に、父と凜己が破顔する。それを見て、凜乃はぷつと噴き出した。

「もう少ししたら仕事が落ち着くから、その時に家に行くね」

「絶対だよ。……あつ、手土産みやげもよろしく」

凜己が要領よくおねだりする仕草に、再び家族皆で笑い合った。

そこからプリモピアットのリゾット、セコンドピアットのポルケッタといった米や肉主体の料理が続く。食べ盛りの凜己に合わせてボリュームたっぷりのコースで、ジェラートプレートとコーヒーが出てきた時は、もう凜乃のお腹はいっぱいだった。それなのに弟はまだ余裕があるのか、父のデザートにまで手を伸ばす。

「すっかり忘れてた。凜己はたくさん食べて身体を鍛える、隠れ筋肉質タイプだったって」

凜乃がその食べっぷりに感嘆すると、凜己は腕を組み、まじまじと姉の頭のとっぺんから腰までを眺める。そして小首を傾げた。

「姉ちゃんはどうちよつと肉をつけるべきだよ。女性らしい体つきだとは思うけど、男はこう、抱いた時に柔らかい——」

凜己が真顔で答えている途中で、父が大きく咳払いした。

「姉に向かってなんて口の利き方だ。凜乃、お前はそのままでもいい。何も無理をする必要はない。向こうで知り合った……ノアくんも、そう言ってくれていただろ？」

ノア——凜乃が通っていたアメリカの大学の一年先輩だ。そして、向こうで初めて付き合った彼氏でもある。ただ彼とは長続きせず、数ヶ月で別れた。とはいえ、ノアに勧められて彼が働く翻訳会社で就職したほど、今でもいい友人関係を築いていた。

「ノアくんは元気か？」

「元気に決まってるわ。いつもエネルギーで、お母さんたちを笑わせてくれていたのを覚えてる。本当に素敵な男性だわ」

母が先に父の質問に答えると、凜己が呆れ顔でため息を吐いた。

「でも、ノアと別れたんだよな。姉ちゃんにとっても優しかったのに。もったいない……」

両親のみならず、凜己もノアを気に入っていた。将来「義兄さん」と呼びたいと冗談まで口にするほどに。

凜乃は正面に座る両親を交互に、そして凜己を横目で見ろ。

「そんな風に言わないで。付き合っていた頃より今の方がいい関係なの。日本に戻ってきてても、よくビデオ通話するぐらいにね。……そういえば、ノアが仕事で近々来日するって」

「マジ!？」

凜己が、店内に響き渡るほどの大声を上げる。すぐに無作法に気付くと、周囲の客に頭を下げて凜乃に向き直った。

「俺も会いたい！日本に来たら必ず連絡して。向こうではノアに良くしてもらったから、今度は俺が日本を案内してあげたい」

就職活動中の凜己にそんな暇があるのかと思いつきながら、凜乃は頷く。

「ノアも喜んでくれると思う。義兄って呼びたい凜己の気持ちは、知って——」

「こんばんは」

唐突に背後から低い声音が響いた。

一瞬にして肌がざわつき、心臓が早鐘を打ち始める。

面を上げて男性の正体を確かめようとするが、そうするよりも前に両親がにこやかに起立し、凜己までが素早く腰を上げた。

凜乃も間髪を容れずあとに続くものの、凜己が「慶斗くん！」と呼んだ途端、ぴたりと動きが止まる。

けいと、くん？ 今、そう言った？

「こんな場所で会えるなんて、もの凄い偶然だね」

「本当に。おじさんの笑い声と凜己の大声に引き付けられましたよ」

ま、まさか、本当に慶斗？

凜乃は緊張した面持ちで、ゆっくりと振り返った。

そこに立つ精悍な男性を見て、心臓がとてつもない速さで鼓動を打ち始めた。息をするのも苦しくなる。それでも彼から目を逸らせない。

十年とは、どれほど長い月日だったのか。

凜乃の記憶にある慶斗は大学生で、まだ青年だった。でも今、朗らかな面様で父と話す彼は男らしく、大人の魅力が満ちあふれている。

身長は昔と変わらず一八五センチほどだが、心持ち胸板に厚みが増した気がする。ジムでトレーニングでもしているのか、見事な体軀だ。

慶斗は父の話に相槌を打ち、母の言葉に口元をほころばせている。

凜乃の記憶に強烈に残っているのは、慶斗に別れを告げたあの日だったため、こんなにも柔和な笑みを浮かべる彼の顔を忘れていた。

そう、昔は今みたいにわたしを見ていた——と慶斗に見入っていた時、突如彼が首を横に動かして、凜乃を目に留めた。

瞬く間に、凜乃の中でも言えない感情が湧き起こる。慶斗に話しかけたいのに、胸の中に歓喜と悲哀が混在していて、声が出てこない。

凜乃は何も言えないまま、自分をまじまじと見つめてくる慶斗を窺う。

何故か慶斗は驚いてはいなかった。それどころか、凜乃を見ても誰だか思い出せないといった表情を浮かべている。

慶斗の些細な顔つきに胸が痛くなる。凜乃が唇を引き結ぶと、慶斗の目線がついとそこに落ちた。一瞬、慶斗の瞳に生氣が宿った気がしたが、彼が凜乃と目を合わせた時にはもう消えていた。

「もしかして、凜乃？ ……久し振りだな」

慶斗の顔に浮かぶのは懐かしさではなく、記憶の隅に追いやった人物をようやく引き出せたような安堵感だった。

「……ええ」

凜乃はショックを受けながらも、笑みを作ってそれを隠した。

こうなるのは予想していたではないか。

発端は國東当主の命令とはいえ、最終的に慶斗に別れを告げたのは凜乃自身。自ら恋人の座を蹴ったツケは、凜乃が払うべきものだ。

「十年振りか？ おじさんの帰国が決まっても帰らなかったと聞いていたから、一生向こうにいるものと思っていたよ。充実した生活を送っていたんだな」

慶斗の声音には、凜乃に対して不快感が一切ない。でもその話し方が、逆に凜乃の神経に障った。慶斗に微笑みかけられた凜乃は、彼に合わせて必死に頬を緩め続ける。

「元氣な姿を見られて良かったよ。あいづら……文哉や彩芽、光里も凜乃に会いたがっていたから、暇な時にでも連絡してやってくれ。あ、光里は仕事で東南アジアを回ってるから、会えるのは新年になるかな」

「う、ん……」

凜乃は目をぱちくりさせた。まさかここで他の幼馴染みたちの名を出すとは思わなかったからだ。慶斗が住む財閥界限には、四属家とまとめて呼ばれる財閥がいる。それぞれの家名になぞらえて、東西南北を付けた通称で名が通っていた。國東慶斗は東家、西門光里は西家、南波文哉は南家、

そして北川彩芽は北家だ。彼らは、皆生まれながらの御曹司や令嬢だった。

四属家は明治時代から共に手を携え、特に昭和初期の苦難の時期に助け合ったと聞いている。それを機に、より深い付き合いをするようになったらしい。

普通なら、凧乃がそんな家の御曹司や令嬢とは知り合えるわけがない。これも全て、國東家への出入りを許され、学校も育ちも違う彼らの幼馴染みとして認められたおかげだ。

特に同い年の北川とは仲がよく、一歳年上の西門、そして慶斗と同級生の南波からも可愛がってもらっていた。

女性陣とは頻繁に連絡を取っているが、南波とは年一回あるかないかの挨拶程度。

早く時間を作って、皆で会いたいな——と考えていた時、慶斗の後ろから一人の女性が顔を覗かせた。

えっ？ 一人ではなく女性と一緒にだったの！

固まる凧乃を見た女性が、にこっと目を細めて軽く会釈してきた。我に返った凧乃も一礼するが、内心ではまだ動揺していた。

なんて綺麗な女性だろうか。

淡いグリーン色の生地に幾何学模様がプリントされたジャージドレスを身に纏い、艶やかな髪を無造作にアップにしている。細い首を彩る後れ毛が、女性をより色っぽく見せていた。

慶斗の隣に立つ女性の存在に、凧乃の心がだんだんと冷たくなる。

昔から慶斗は、本命の女性以外とは決して二人きりで夕食をしない。つまり彼女は、慶斗の心を

手に入れた恋人ということだ。

凧乃が言葉を失っていると、女性が慶斗の腕に華奢な手を置いた。

「慶斗。彼女はどなた？」

女性の鈴を転がすような可愛らしい声に、慶斗が横を向く。

「うん？ ああ、彼女は本間凧乃。俺の幼馴染みだ。君より二歳年上だな。……凧乃、彼女は松永優希さん。俺にとって、この上ない大切な女性だ」

大切な、女性……

慶斗にそう言われて嬉しそうにする松永が、彼に擦り寄る。密着度もさることながら、ジェルネイルを施した長い爪が腕を軽く引く掻くのを見て、凧乃の心臓がぎゅっと縮まった。

二人が別れて十年経つ。心のどこかでこういう光景を目にする可能性があると思っていたが、実際に目の当たりにすると、かなりショックだった。

「はじめまして。あなたが慶斗の幼馴染みだったのね。彼と付き合い始めてから、あなたの噂はあたしの耳にも届いていたわ」

噂？ 誰から？ 幼馴染みたち？ それとも慶斗？

凧乃は込み上げる不安から目で慶斗に問いかける。でも彼の表情からは読み取れない。その無関心さに胸が痛くなる。それを押し隠しながら無表情を装い、松永に焦点を合わせた。

「はじめまして」

凧乃がそう言うと、松永は慶斗の腕に惜しげもなくふくよかな胸を押し付けた。

「びっくりしたわ。中流階級でもない一般家庭出身のあなたが、御曹司の慶斗と幼馴染みになれたなんて」

その言葉に両親は俯き、凧己は松永を睨み付ける。

場の空気が悪くなり始めた時、慶斗が松永の名前を呼んだ。

「言葉に気を付けろ」

「あつ、ごめんなさい。悪い意味で言ったのではなくて……。一般家庭出身の本間さんでも國東のおじさまに可愛がられているのが、とても不思議で。あたしにもその秘訣を伝授してほしいな」

「別に秘訣は――」

凧乃が答える前に、すぐに松永が口を挟む。

「まあ、なるようにしかならないわよね。本間さん、これからはあたしとも仲良くしてね。國東家に入る前に、彼の家族や生活のリズムとかも知っておきたいから」

「優希」

再び慶斗に諫められると、松永は軽く肩を竦めた。

「わかりました。自分でおじさまたちと仲良くします。早く慶斗と一緒にになりたいから」

小声だったが、それは凧乃の耳に届いた。凧己にも聞こえたみたいで、弟が大きく咳払いする。松永は何事もなかったかのように、ただ妖艶な笑みを浮かべた。

「慶斗、そろそろ出ましょう。いつまでも立って話していたら、他のお客さんに迷惑だわ」

「そうだな。俺たちは先に失礼しよう。……おじさん、本社へ立ち寄った時は顔を出しますね」

「ああ、必ず声をかけてくれ。待ってるよ」

慶斗は両親に挨拶し、凧己と凧乃に軽く頷くと、松永の背に手を添えて歩き出した。

凧乃が見送る慶斗の背中が、自然と十年前の光景と見事に重なる。そして別れた当時と同じく、彼が振り返ることは一度もない。一つだけ違うのは、今回は腕に手を絡めてくる松永に微笑み、二人でレストランを出ていく慶斗の姿だった。

将来を見据えて前を向くのは素晴らしいこと。だが、関心を向ける相手はただ一人、恋人の松永だけだと示されたせいで、凧乃は気落ちするのを止められなくなる。

その時、凧乃は凧己に肩を叩かれた。

「姉ちゃん、座ろう」

「あつ、うん」

凧乃は両親や凧己に続き、椅子に腰を下ろした。

「まさか、デート中の慶斗さんと会うとは思ひもしなかった。本当に驚いたよ」

「ええ、本当に」

話し始めた両親を見て、凧乃はコーヒークップを握んだ。

「松永さんとは長い付き合いなのは知っていたが、ちよつと人前でベタベタし過ぎだったな」

「仕方ないわ。相手は慶斗くんだもの。……彼女、彼が好きで堪らないのよ」

「あの……長い付き合いって？」

つい気になってしまい、凧乃は恐る恐る訊ねた。

「そういえば、凜乃は彼女を知らなかったな」

「そうね。桐斗^{きょうと}くんを覚えてる？」

「もちろん。慶斗の弟でしょ？」

母の問いに凜乃は答えた。

凜己と慶斗の弟は同級生なのもあり、とても仲がいい。家族で渡米したあと、桐斗は凜己に会うためにわざわざLAまで遊びに来たほどだ。

凜己が日本へ戻って以降会っていないが、桐斗と松永にどうい繋がりがあるのだろうか。

凜乃が考えていると、母がコーヒーカップに触れながら遠くを見るような目をする。

「あれはそう、確か……桐斗くんの成人祝いで開かれたパーティよ。慶斗くんは初めてそこに彼女を伴ってきたの」

「ということは、あれからもう一年か？」

「そうなるわね。あのパーティを境に、慶斗くんの隣にはいつも彼女がいたわ。彼との付き合いは長いけれど、同じ女性と数ヶ月も一緒にいるなんて……こんなの初めてよ」

「結婚を考えているのかもしれないな」

け、結婚……？

凜乃が息を呑むのにも気付かず、両親は話を続ける。

「今日の様子からして、お互いに愛し合っているのが伝わってきたから……それも有り得るわね」

「男三兄弟とはいえ、慶斗くんは國東家の長男であり跡取りだ。当主は彼に早く家庭を持つてほし

いと願っている」

両親の話を聞いて、凜乃の鼓動が早鐘を打ち始める。もう耳を塞ぎたいと思うほどだ。

凜乃が軽く俯くと、凜己が横で大きな唸り声を上げた。

「確かに、家族は早く結婚してほしいみたいだけど、慶斗くんはどうなんだろう。桐斗が言うには、これまで一度も恋人を家に連れてきてないってさ。パーティにはさっきの女性を同伴するから、それなりに仲がいいとは思うけど、結婚はまだ考えてないんじゃないかな」

「でももう三十一歳だし、しばらくしたらいいお話が聞けるかもね」

母の言葉に、凜己が恐ろしいものでも見るような表情をした。

「俺の時には急^せかささないでくれよ。前から言っているけど、俺は三十歳まではゆっくりと人生を楽しむんだから」

「はいはい、わかってます」

必死に告げる凜己に、母が呆れ顔で返事すると、父も母に同調して「お前は……」と啞然とした様子で呟いた。

屈託なく話す家族の団らんの場合だったが、凜乃はそこに加われなかった。突然出た慶斗の結婚話のせいで、意識が別のところに飛んでしまったからだ。

何も考えたくない、何も聞きたくない、何も話したくない……

凜乃は自分の殻に閉じ籠もり、全てを遮断した。それは凜己が母のデザートにまで手を出し、ぺろりと平らげて「ご馳走様でした！」と両手を合わせるまで続いた。

食事を終えて店を出ると、母に腕を取られた。

「今日は楽しかったわね。ここで別れるけど、あなたもしっかりご飯を食べて、身体に気を付けなさいね」

そういえば、食事中に最寄り駅とは反対側にあるパーキングに車を停めたと言っていた。つまり、凧乃とは逆方向へ向かうため、ここでお別れなのだ。

「それで……、はい、これ」

母が小さな手提げ袋を凧乃に差し出す。その袋には、有名ブランドのロゴが印刷されていた。「何？」

「何って、誕生日プレゼントじゃないの。遅くなってしまったけど、お父さんとお母さんからよ」凧乃は目をぱちくりさせて、両親を交互に見つめる。

「食事だけで充分だったのに」

「十年振りに日本に戻ったお祝いでもあるんだ。記念に残るものがないと思ってな」

「ありがとう。とっても嬉しい！」

凧乃は両親の愛情に素直に感謝し、袋を受け取る。続いて、凧己が小さな袋を差し出した。

「姉ちゃん、これは俺から」

「凧己からも!？」

「もちろん。今日は姉ちゃんの帰国祝い兼誕生日会だろ？ 確かに俺は、姉ちゃんに奢ってもらってばかりだけど……お祝いは別だよ。ほら、そうしないと、もう何も買ってもらえ——」

「一言余計よ」

凧乃が凧己を小突く。弟は苦笑いしながらも、悪びれる素振りもなく舌を出した。

弟は昔からとても元気で活発だ。それは成人を過ぎた今でも変わっていない。社会人になれば落ち着くかもしれないが、凧乃はいつまでも今のままでいてほしいと思っている。

それが凧己自身の個性でもあるから……

凧乃は自分よりも十センチ以上高い弟を見上げた。

「ありがとう」

凧乃は照れる凧己に微笑み、再び両親に顔を向けた。

「今日は家族と一緒に過ごせて本当に楽しかった。気を付けて帰ってね。……凧己、安全運転よ」最初は両親に、続いて郊外のマンションまで運転する凧己に念を押す。

「ああ、わかってる」

凧己が力強く頷いた。

「凧乃も気を付けて帰るのよ。せめて夏季休暇中には一度家に帰ってきなさい」

「うん。じゃ、またね」

母と父に頷いた凧乃は手を振り、その場で家族を見送った。

そうして家族の姿が見えなくなると踵を返し、最寄り駅に向かう。

梅雨が明けて以降、一気に気温が上昇し、ここ最近猛暑日が続いている。むわっとした湿気が肌にまとわりつくせいで、毎晩エアコンがかかせないほどだ。

しかし今夜に限って、無性に肌寒さを感じる。やはり十年振りに慶斗と再会したことが、衝撃的だったのだろう。

凜乃は腕を擦りながら、目線を落とした。

慶斗の恋人は、とても目を引く美女だった。より一層男性の色気を纏うようになった彼とは、お似合いだ。

「色気……」

当時、青年としての活力が漲みなぎっていた慶斗には、色気などなかった。それぐらいの年月が経ったという意味だ。だから慶斗の隣には今、綺麗な恋人がいる。

あの日、もし違った決断をしていたらわたしたちの関係は続いていた？———と思ったところで、凜乃は心の中で激しく頭を振る。

たとえ当時に戻れたとしても、凜乃は國東当主の命令に絶対にノーとは言わないし、慶斗の視野を狭めたくないという判断をする。

結果、今と同じ流れになるだろう。それがわかっているのに、考えてしまう。

もし別れていなければ、慶斗の隣に立つのは松永ではなく、自分だったかもしれないと。

そんなことは叶わぬ夢なのに……

自嘲気味に笑い、軽く俯く。そして負の感情を追い払うように、大きく息を吐き出した。

今も昔も、慶斗への想いは変わっていない。でも、それはそれでいいのでは？ 凜乃は愛の見返りを求めて、彼を愛しているわけではない。ただ再び幼馴染みとして付き合えるようになりたいだけだ。

けだ。

その上で、嫌いになって別れたのではなかったことを慶斗に知ってほしい。

國東当主の言葉によるものだとは言えないが、当時の凜乃の胸中を知ってくれたら、慶斗もあの別れは必要だったとわかってくれると思いたい。

凜乃は気持ちを強く持つと前を向き、やや足取りを速くしながら新宿駅へ真っすぐ進む。

そちらへ向かう人の数が増えてきた時、唐突に二の腕を掴まれた。

「……っ!？」

勢いのまま横へ引つ張られるや否や、凜乃は叫ぼうとする。しかし、自分を掴む男性の顔を見て、声が出なくなった。

何故なら、凜乃の腕を掴んで歩くその人こそ、先ほど再会した慶斗だったからだ。

でも、どうして凜乃を引つ張るのか、何故松永が傍にいないのか、理由がわからない。

頭の中で疑問符がぐるぐる回るのに、慶斗の精悍な横顔を見ただけで心臓のドキドキが止まらなくなっていく。

こうして慶斗の温もりを感じていると、幸せだった過去の出来事が走馬灯のように甦よみがえってくる。

テーマパークへ行った時、慶斗は今みたいに凜乃の手を引いて走り、微笑みかけてくれた。勉強が嫌で家庭教師から逃げた時、彼と一緒に隠れて秘密を分かち合った。どれもこれもいい思い出、意識が当時へ飛びそうになる。

そうならなかったのは、慶斗が脇道に入って足を止めたせいだった。

「凜乃」

名前を呼ばれて、凜乃は喘ぐように空気を吸い込み、おずおずと慶斗と目を合わせる。せめて幼馴染みとして見てくれますように——と祈るが、慶斗の表情はレストランで会った時と同様で、他人行儀だった。

やっぱり許してくれていない……

凜乃が何も言えずに口を閉じていると、慶斗が大きく息を吐き出した。

「さつきはいろいろと話せなかったから、待ってた」

「わ……わたしを？　でも、家族と一緒に車で帰るとは思わなかったの？」

「賭けたんだ。車か、それとも電車か。前者なら凜乃との関係はそれまでだと。だが、後者なら——」

「後者なら？」

思わず問いかけた。しかし慶斗は答えず、ただじつと真摯な眼差しを凜乃に向ける。

二人の間に漂う空気が重くなってきた頃、慶斗の唇がほんの僅かに引き結ばれた。

慶斗はなんらかの感情を押し殺す時、昔からそういう仕草をする。長男として我慢を強いられる場面では、特に表情に表れた。

今もその仕草が変わらないと知り、なんだかホッとした。

凜乃が知る慶斗が、目の前にいるから……

だからか、昔のようについ手を伸ばしてしまう。でも慶斗が鼻で笑ったため、凜乃は上げかけた

手を途中で止めた。雰囲気からして、昔みたいに気軽に触れるのは憚^{はば}られたからだ。

咳払いして手をゆつくり下ろし、居心地悪さを誤魔化した。そこでふと、先ほどまで慶斗といった松永の存在を思い出した。

「あの、彼女は？」

「彼女？　ああ、優希か」

凜乃が小さく頷くと、慶斗が片眉を上げた。

「そんなことを訊きたいのか？」

「彼女とお店を出ていったのに、その、傍にいないから……」

前触れなく慶斗が二人の距離を縮めてきた。同時に感情が伴わない冷たい瞳で見つめられて、次第に凜乃の声が細くなっていく。

本能で危険だと察した凜乃は、慶斗から離れようと片足を下げた。しかし、彼がさらに一歩詰めるため、結局二人の距離感は変わらない。

「あっ！」

後ずさりし続けたせいで、凜乃は建物の壁に背中をぶつけてしまう。それでも慶斗は二人の身体が触れ合うぐらいに近づき、壁に手を突いた。覆い被さる慶斗に視界を遮られ、他のものが目に入らなくなる。

凜乃が引き攣った声を漏らしたその時、慶斗が微笑んだ。これまでの冷たい言動と一致しない表情に、凜乃に緊張が走る。

知らず識らずバッグの手提げ部分をきつく掴んでしまうが、警戒していることを感じさせないように無理やり唇の端を上げた。

「慶斗？ あの……」

「充実した留学生生活を送っていたんだな。おまけに向こうで就職までして……。離れ難い出来事でもあったところか？」

慶斗の表情は穏やかだが、言い方には棘を感じた。まるで、凜乃を責めているみたいだ。

そんな言い方はやめて——と慶斗に訴えたくなるものの、思い留まる。もし強く言えば、彼はこういった行動に出るだろうか。

慶斗は壁に手を出してわざわざ凜乃が逃げられないようにしているのだから、ここは従順な態度を示した方がいい。

凜乃は咳払いし、恭しく目を合わせた。

「離れ難いというか……。実は大学の先輩の紹介でインターンシップに参加させてもらったの。アジア人はいたけど日本人はいなくて。自国を大切にする社員の姿に感銘を受けて、わたしも日本の企業や文化作品の架け橋になりたいなって」

凜乃が真正直に答えると、慶斗がバカにしたように唇の端を引き攣らせた。

「架け橋になりたいだつて？ 自分の手で人との関係を壊す凜乃が？」

そう言った慶斗に、凜乃はいきなり顎を掴まれた。

「俺の言う意味がわからない？ じゃあ、もう一度思い出させてやる」

思い出させる？ いったい何を？ ——そう口に出す前に、慶斗が顔を傾けて、凜乃の唇を奪った。

「……っ！」

凜乃は顔を強張らせて目を見開いた。

あまりにも突然だったため咄嗟に動けなかったが、慶斗の唇がかすかに動くと共に振り返り、彼を押し返そうとする。しかしその動きは封じられ、さらに身体を密着させられる。

瞬く間に慶斗と恋人同士だった記憶が甦り、心の奥で密かに燦っていた火が燃え広がった。

慶斗の胸に置いた手が震え、指先の感覚がわからなくなるほど蕩けていく。そのまま浸りそうになるものの、凜乃の記憶にある慶斗とのキスの違いに気付き、身体が凍りついた。

当時の慶斗は、甘い口づけで凜乃を虜にした。でもこのキスは冷たく、力強く、そして無遠慮に貪ってくる。思いやりなどがまったくない。とはいえ、納得もできた。

既に凜乃は、慶斗から幼馴染みとして見てもらえなくなっているのだから……

凜乃は震える手に力を込めて、慶斗を叩こうとした。しかしそうされるとわかっていたのか、彼の片手が凜乃の背中に回されて引き寄せられる。

「……んっ、ふ」

慶斗の体温、スパイシーな香りに脳がくらくらする。凜乃が空気を求めると、滑らかな舌がするりと口腔に挿入された。

下腹部の深奥が痺れて腰が砕けそうになる。でもそうならなかったのは、慶斗が凜乃をがっちり

支えていたためだ。

「……っあ、はあ……う」

過激なキスは、凜乃の心を引き裂こうとするかのように続く。

もうダメ、何も考えられなくなる！

酸欠で息苦しくなってきた頃、慶斗に乱暴に身体が押されて唇が離れた。

新鮮な空気を胸いっぱい吸い込めてホッとするが、再び神経が過敏になる。凜乃を見下ろす慶斗の双眸には、今までに見たこともない怒りと憎しみが込められていたからだ。

「俺が本当に留学中の話を聞いたかったとでも？ そう思っていたのなら残念だったな。凜乃の過去は、一切知りたくない。だが——」

慶斗は凄みのある低い声で言い放ち、凜乃の唇について視線を落とした。

「まさか真実を知ることになるなんてな。凜乃は自分から俺を捨てておきながら、この十年……まだ俺を忘れていなかった。そうだろ？」

慶斗が鼻で笑い、ゆっくり視線を上げた。

「俺は凜乃をすっかり忘れていたっていうのに」

慶斗の言葉が鋭い矢となって胸に刺さり、凜乃の顔から血の気が引いていく。

過去とは違う慶斗の態度から、もう幼馴染みとして見てもらえないとわかっていたのに、ここまではっきり告げられると想像以上にショックだった。

「けい——」

慶斗を呼ぼうとする言葉が途中で掻き消える。やにわに彼が、凜乃の顎を掴んで顔を近づけてきた。

凜乃に対する猛烈な憎しみを宿した、慶斗の冷たい眼差し。

慶斗は十年前の出来事を忘れてはいない。彼に相談もせず一方的に別れを告げた凜乃を、決して許す気がないのだ。

「ごめんなさい……！——と目で訴えるが、慶斗は凜乃をバカにするように鼻で笑った。

「だが、残念だったな。俺はもう……凜乃をなんとも思っていない」

その一言が、さらに凜乃を打ちのめした。ほんの僅かな情すら持ち合わせていないと言ったのも同然だからだ。

凜乃はしばらく何も言えず、愕然としながら慶斗を見つめた。

本当にもう無駄？ 昔みたいに仲良く会話することすらできないのだろうか。

そこで凜乃はハッとした。

これだけ慶斗は凜乃を拒んでいる。一度ならず、二度も……

しかし慶斗が撥ね付けても、二人の会話は好転もしなければ暗転もしていない。つまり、これ以上、二人の関係は悪化しないのではないだろうか。

そのことに気付いた途端、勇気が出てきた。

自分の意見をはっきりと告げたいのなら、今しかない。

「だったら——」

感傷的に声が掠れる。それでも凜乃は氣力を振り絞った。

「どうしてわたしを待っていたの？ わたしのことなんてすっかり忘れていたのなら、待ち伏せしなくても良かったじゃない。なのに、こんな風にキスを――」

最後まで絞り出せなかった。慶斗が凜乃の言葉を塞ぐように再び唇を奪ったからだ。

凜乃の身も心も引き裂くような乱暴な口づけにもかかわらず、身が震えるほどの喜びに包み込まれていく。

憎しみや怒りといった感情をぶつけられてもいい。

それはつまり、言葉とは裏腹に凜乃に無関心を装えない事実でもあるから……

「っんう……」

慶斗の舌が挿入される。凜乃は反射的に彼の腰を掴むが、その直後また押し返された。

「……っ！」

声にならない声を発して、慶斗が唇を手の甲で拭う。そして凜乃に鋭い一瞥を投げると、無言で背を向けて立ち去った。

呆然としていた凜乃は、ただ慶斗の背中を見送った。

こんな酷い扱いをされても、わたしは慶斗を強く想ってる――と彼への愛を痛感しながら、その場に立ち尽くしたのだった。

第二章

立秋とは名ばかりの酷暑で、蒸し暑い日が続く八月上旬。

翻訳課にある自分の席で仕事をしていた凜乃は、窓から注ぎ込む夏の陽射しに我慢ができなくなり立ち上がった。

「暑っ……」

なんと肌が焦げそうなほど陽射しが強いのか……

日本の湿度と気温の高さは知っていたのに、海外生活に慣れたせいでも、この茹^くだるような暑さをすっかり忘れていた。

最初こそ、窓際の席に案内されてとても嬉しかったが、毎日太陽の陽射しを浴びて仕事をするのはさすがに辛い。

もちろん遮光ロールカーテンで陽射しを遮られるが、そうすると手元が暗くなってしまう。そのため、できれば開けっ放しで過ごしたい。

そう思うのに、やはりこの暑さには耐えられない。

凜乃は窓際まで行き、ロールカーテンの紐に手を掛ける。引っ張る前に、窓の向こう側に広がる背の高いビル群を眺めた。

LAにある本社にいた時は、高台から海まで続く街並みをのんびりと見て仕事に勤しんでいた。休憩時間には同僚と近くのカフェへ行き、コーヒーを手にアメリカンフットボールやバスケットボールなどの話で盛り上がった。

社内も賑やかだったが、日本では——と思いながら、凛乃は振り返る。翻訳課に所属している社員は、凛乃を入れて計八人。本社から転勤になったのは凛乃だけだが、大半が帰国子女だ。留学経験がない同僚も一人いるものの、彼は外国語大学を卒業している。皆、語学に深く携わってきた経験者ばかりだ。

誰もが仕事熱心で、今も無駄口を叩かずに仕事をしている。

ここで働くようになって数ヶ月経つが、何度見てもこの光景は驚きでしかなかった。ほんの少し身動きするだけでも、同僚たちの邪魔をしてしまいそうだ。

凛乃は静かにロールカーテンを下げて陽射しを遮ると、足音を立てないようにゆっくり歩いて再び席に着いた。

留学中から使っている辞書を出し、現在請け負っている翻訳を始める。それは海外企業との取引引きが多くなってきた、紡績会社の案内パンフレットだ。

当然ながら専門用語が多く、言い回しがかなり複雑なため神経を使う。そういう箇所には付箋を貼り、再度チェックできるようにしている。

付箋だらけの資料にため息が出るが、凛乃は同僚たちと同じように目の前の仕事に集中した。眩い陽射しが直接当たらなくなったおかげで、エアコンの効きが良くなり、薄らと汗ばんでいた

首の後ろも涼しくなってきた。

これで仕事も捗ると思った矢先、オフィスのドアが勢いよく開いた。

「皆、聞いてくれ」

課長の杉谷が皆に声をかける。三十代後半の彼は身長が一八〇センチもある独身男性だ。髪をグレー色に染めたその容姿は、目を奪われるほど格好いい。

だからといって、惹かれてはいないが……凛乃は仕事の手を止めて、杉谷が口を開くのを待つ。彼は同僚たちの視線が自分に向いているのを確認し、片手を軽く上げた。

「実は急用の仕事が入った。皆にデータを送る」

そう言った直後、パソコンに一通の依頼書が届いた。備考欄には「経営陣の決定に基づくもの」と記されている。つまり、社長案件と受け止めるべきだろう。

仕事内容は、取引文書の翻訳。ビジネス上の通知、請求、そして契約などの文書を作成する作業のようだ。

出向期間は九月から十二月末までの四ヶ月間。但し、仕事に慣れるために盆明けから先方に行ってほしいと補足があった。

事業拡大か何かで、急遽翻訳者を採らなければならなくなったと考えられる。社長が関わっているということは、大変な仕事になるに違いない。

「そこにもあるとおり、若干条件が厳しい。アメリカの西海岸に精通している者、留学経験がある者、もしくは海外の会社で働いた経験がある者だ」

同僚たちの目が、短髪の男性社員と長い髪をローポニーテールにした女性社員、そして凜乃に向けられる。

「条件に当てはまるのは、加賀屋^{かがや}くん、丹羽^{にわ}さん……本間さんになる。僕としては、加賀屋くんが一番適任——」

「無理です」

すぐさま答えたのは加賀屋だ。三十代後半の彼は、世界中のマラソン大会に参加するほど走るのが好きで、忍耐力も体力もある。加えてポルトガル語やドイツ語も堪能ときている。予測不可能な今回の仕事には、彼こそうってつけだ。

なのに、どうして社内のエースでもある加賀屋が断るのか。

「もちろん新しい仕事に挑戦したいです。ただ、現在請け負っているものを疎^{おろそ}かにできません。納期が目の前ですので、最後まで責任を持たなければ」

「そうか……確か、今の仕事は美術館の翻訳だったな」

「はい」

神妙に頷く加賀屋に、杉谷が腕を組みながら唸る。

「今回の仕事は社長が関わっているから、有能な加賀屋くんに任せなかったんだが……。なら、丹羽さんはどうだ？」

「あたしですか!？」

近くに座っていた二十代後半の女性——丹羽が嫌そうにする。

「なんだ？ 丹羽さんも嫌なのか？ おそらく金一封が出るぞ」

「それについては心が引かれるんですけど……、あたし、十一月にまとまったお休みをいただく予定なのを覚えてますか？ 課長からもオッケーをいただきましたよね？」

「あつ、そうだった!」

杉谷はすっかり忘れていたと、額をぼんと叩く。

「お姉さんの結婚式で、ブライズメイドをするんだったな」

「はい。姉の彼氏が本国のLAに戻るのに合わせて、向こうで結婚式を挙げることになって。なので、仕事を引き受けると途中で抜けなければなりません。そうやってしまうと、先方に失礼ではないかと思って」

「丹羽さんの言うとおりだ」

杉谷がうんうんと頷き、おもむろに凜乃に視線を移す。しかし、加賀屋と丹羽に向けた期待する目つきとは違い、心配そうな表情だった。

「となると、本間さんになるんだけど——」

ギクツとする凜乃に、杉谷が近づいてくる。途中でミーティングテーブルから椅子を引っ張り出すと、凜乃の前に置いて腰を下ろした。

「本間さん、本社では有能だったという報告は受けている。だが、向こうのやり方とこっちのやり方は全然違うから、まだやりにくさを感じているだろ？」

凜乃は大きく頷いた。

支社で一通りの指導は受けたが、やはり今でも戸惑うことがある。

そのため、他社で仕事をする自信はない。だからこそ加賀屋や丹羽が適任なのだが、彼らが断らざるを得ない理由も理解できた。

杉谷はいつたいていどうするのだろうか。

杉谷を窺うと、彼は明らかに困惑した顔つきで大きく肩を落とした。

「日本に戻ってきてまだ数ヶ月、慣れていないのは当然だよ……。でも、本当に申し訳ないけど、もう本間さんにお願ひするしかない」

凜乃は見開いて息を呑んだ。

「わたし、ですか……？」

「ああ。本間さんは誰に対しても物怖じしないし、難しい仕事にも前向きに取り組む姿勢を見ているから、絶対に乗り越えられると思う。だが……日本に慣れていないせいで、心身ともにストレスを抱えたらどうしようとも心配もしている。でも、もう本間さんに頼むしかないんだ」

杉谷の言うとおり、条件に合う三人のうち二人がダメなら、自ずと凜乃になる。でも、不安で堪らなかった。社長案件とも言える仕事を担当する力がないのに、凜乃に務まるのだろうか。

返事ができないまま椅子の上で身体を縮こまらせていると、杉谷が小さく何度も頷いた。

「心配だよな？ 自分にできるのかって……。でも、出向に関しての研修をきちんとするし、本間さんの不安を払拭できるように相談に乗る。だからどうか、引き受けてくれないか？」

凜乃は杉谷の眼差しを真正面から受け止める。

正直、請け負える自信がない。でも、支社に異動してからというもの、拙いながらも同僚たちと上手く付き合えている。だからこそ、何事も勇気を持って、一歩前に進むべきではないだろうか。

それに、先方の要望に応じられるのは、現時点で凜乃しかないのだ。

覚悟を決めるように息を吸うと、凜乃は杉谷を見つめた。

「わかりました。わたしに務まるのかわかりませんが、精一杯頑張ります。どうぞよろしくお願いします」

凜乃の返事を受け、杉谷の緊張が一気に解けていった。

「ありがとう！ これから今の仕事と並行して、出向に関しての研修をスタートさせるよ。本間さんが少しでも安心して仕事ができるように。本間さんは、わからないことがあつたらすかさず訊いてくれるから、きっとスムーズにいくと思う」

「あっ、すみません、もしかして迷惑でしたか？ 昔から理解できなければすぐに訊くのが癖で……」

凜乃は苦笑いして謝罪する。

幼い頃から、よく慶斗や他の幼馴染みたちを質問攻めにしていた。彼らと生活環境が全然違つたため、凜乃にとってどれも目新しいものばかりだったためだ。

慶斗——と彼の名前を心の中で呟いた途端、十年振りに彼と再会を果たした日の出来事が脳裏に浮かんだ。

恋人の存在、不意打ちのキスなど、全てにおいて衝撃を受けたが、あの日からまだ一週間しか

経っていないなんて……

まるで昨日のことにように、鮮明に慶斗とのやり取りを思い出していると、杉谷が席を立った。凜乃是我に返り、慌てて杉谷の動きを目で追う。

「じゃあ、午後二時からミーティングルームで始めよう。僕は社長に報告してくる」

杉谷は意気揚々とデスクの間を縫って、オフィスを出ていく。

話が終わったのを見計らった加賀屋と丹羽が、すぐに謝ってきた。同僚たちからは「頑張れよ。何かあったら、相談しろよ!」と声援を送られた。

その後、同僚たちはそれぞれ仕事に戻っていく。徐々に社内は静まり、キーボードを打つ音が響き出した。

同僚たちの仕事に対する姿勢に感銘を受けながら、凜乃も身を引き締めた。きちんと研修を受けて、出先で失敗しないようにしなければ……

凜乃は自分に言い聞かせると、正面に向き直った。

仕事を再開する前に、メールソフトを起動させる。送信先は本社勤務のノアだ。

凜乃は「Dear Noah——」と打ち、凜乃が本社で担当していた翻訳の進捗状況を訊ね、さらに凜乃が新しい仕事を任された件を綴る。
「よっ」

メールを送信すると、凜乃は現在の仕事に取り組むため辞書を開いたのだった。

——一週間後。

お盆が終わり、ようやく正常な日々が戻ってきた。

「疲れが溜まっているけれどね」

凜乃は肌を刺す陽射しを遮るために手を目の上で翳す。そして目を眇め、木漏れ日で輝く木々を仰いだ。

夏季休暇中に実家に帰省した際、凜乃は國東家へ挨拶に行くべきかを相談した。すると父に、國東グループの設立記念パーティが九月に開かれるので、そこで改めて留学させてもらったお礼と帰国報告をするようにと言われた。

パーティ——もしかしたら再び慶斗と会えるかもしれない! でも彼は凜乃と接したくないだろう。彼の心の中では、凜乃はもう幼馴染みでもなんでもない、赤の他人なのだから……

それに、今の慶斗には恋人の松永がいる。彼女は凜乃たちが幼馴染みだと知っているとはいえ、実は十年前前に別れた元恋人同士だと知れば、絶対に気分が悪くなるに決まっている。

凜乃だって、もう慶斗とは特別な関係でもなんでもないのに、仲睦まじい松永たちの姿を見たら、きつと胸の奥がもやもやするだろう。

二人のためを思うのなら、パーティでは慶斗に接触しない方がいいのかもしれない。

慶斗の幸せを壊すつもりはまったくないのだから……

それは本心だ。なのに、慶斗と松永が愛を誓い合う姿が頭を過るたびに、気落ちしてしまう。

そんな凜乃の気持ちを軽くしてくれたのが、凜己だった。

帰省中、凜己は友人たちとは一度も外出せず、家族と出掛ける日以外は凜乃を外へ連れ出した。そのせいで余計な考えごとをする暇がなかったのは有り難かったが、実のところまったく身体が休まっていない。

凜己と二人暮らしをしていた時もこんな感じだったが、まさかあれから数年経った今でも、元氣いっぱいだとは思ってもしなかった。これも若さゆえなのだろうか。

とはいえ、自分より背が高くて体格もいい男前の弟に甘えてもらえるのは嬉しい。

それに、誰にも渡したくないと思うほどの女性が現れれば、きっと凜己の性格も変わる。それまでは、弟に振り回されるのも悪くない。

凜乃は意気揚々と、出勤を急ぐ人たちの波に乗って歩き出した。

今日から出向先での仕事が始まる。

とにかく研修を受けたとおり、先方の希望を理解した上で作業を進めれば問題は回避できるはずだ。

最後まで凜乃を心配してくれた杉谷や翻訳課の皆にも迷惑をかけないためにも、まずは目先の仕事に集中しなければ……

凜乃は、多くの人々がどんどん自動ドアへ吸い込まれていくオフィスビルを見上げた。

「この二十六階ね」

凜乃が勤める翻訳会社の日本支社は、緑地を眺められる郊外にある。しかし出向先は都心のオフィスビルに入っているため、周囲はビルばかりだ。

多少息が詰まる感じがしないでもない。ただビルの間から見える青空は綺麗だし、十数分ほど歩けば大きな公園があるので、息抜きがしたければそこでできそうだ。

凜乃は気を引き締め直すと、オフィスビルに入った。

既に受け取っている特別通行証は、勤務時間にあたる十時から十八時まで使用可能となっている。今は十時なのでもう使える状態だ。凜乃はセキュリティを通り抜け、エレベーターで目的の階で降りた。

広いフロアに設置された、数社の受付。その中の一社、KGコントラクトこそが、凜乃が年末まで働く会社だ。

KGコントラクトは設立三年目だが、たった二年で都心のオフィスビルを借りられるぐらい業績を伸ばした。銀行からの融資額も多く、顧客の開拓も進められたのだろう。本当に凄い会社だ。

凜乃が受付に歩き出すと、そこにはショートボブの若くて可愛らしい女性がいた。

にこやかに応じる女性の前に、特別通行証を置く。

「おはようございます。本日よりお世話になります、本間と申します」

「本間さま、伺っております。担当の者をお呼びしますので少々お待ちください」

女性は受話器を取り上げる。

「受付です。本間さまが到着されました。……はい、ではそのようにお伝えいたします。よろしく願います」

受話器を置いた女性は、凜乃に特別通行証を返した。

「すぐにお迎えにまいりますとのことです」

「ありがとうございます」

凜乃が微笑むと、受付女性もにつこりした。

担当者が現れるのを待つ凜乃の近くで、受付女性もその場で立っている。

次第に、どちらも話さないでいることに居心地の悪さを感じてきた。

こういう時間って、あまり好きじゃないのよね。彼女に話しかけたらダメなのかな？ —— そんなことを考えていた時、受付の横にある通路から一人の男性が現れた。

短髪で眼鏡をかけたその男性は、百八十センチぐらいありそうなほど背が高い。尚且つ彫りが深く、目鼻立ちが整っている。グレー地にストライプ柄が入ったスーツを着ているが、ノーネクタイのため、堅苦しい雰囲気は一切なかった。

「本間さんですか？」

「はい、本間です」

そう答えると、男性が革のケースから名刺を取り出した。それを見て、凜乃も名刺入れを出し、彼と名刺交換する。

「緒方と申します。社長のアシスタントをしています。年末までいろいろと無理を言うかと思いますが、よろしくお願いします」

礼儀正しく挨拶をされて、凜乃も慌てて頭を下げた。

「全力で対応いたしますので、わたしの方こそご指導のほどよろしくお願いします」

「あまり気負わなくて大丈夫ですよ。……あつ、彼女を紹介しておきますね」

緒方が受付の女性を示すと、彼女は可愛らしい口元をほころばせて受付カウンターから進み出た。

「彼女は受付担当の河合鞠子さん。とても明るく親しみやすい人なので、本間さんも気兼ねなく声をかけられると思います」

「河合さん、どうぞよろしくお願いします」

凜乃が改めて軽く頭を下げると、河合は可愛らしく唇の端を上げた。

「仲良くしていただけると嬉しいです」

「こちらこそいろいろとお話しさせてください」

人当たりのいい河合と接する機会があれば、ここでの大変な仕事にも耐えられそうだ。

凜乃は河合に微笑んだ。

「では、社内を案内しましょう」

「お願いします」

返事をする凜乃に緒方が頷く。直後に横を向いて、河合に「じゃあ、また」と告げた途端、彼女の双眸に輝きが増した。

凜乃は自然と河合の顔に目が釘付けになる。

もしかして、河合は緒方のことを……？

確かに緒方は知的で整った風貌をしている。河合が憧れるのも無理はない。純粹な気持ちを顔に出せる河合を羨ましく思うと同時に、凜乃はもう二度と彼女のように慶斗を見られないと思うと気

落ちしてきた。しかしすぐに感情に蓋をすると、緒方に並び、オフィスに入った。

「向こうがメインフロアです」

緒方が廊下の先に広がるフロアを指す。パーティションで区切られたデスクもあれば、ミーティングが出来るような大きなテーブルもある。ここでは、仕事をしている社員が何人かいた。

設立から三年経つが、社員はそれほど多くない。各部署に五人から七人程度だ。そうすると一人一人の仕事量が多くなるはずなのに、皆爽やかな表情で仕事をしている。

不思議に思っていると、緒方が部署の説明をしながら社員数の理由を話してくれた。

それぞれがプロフェッショナルなため、社員が少なくても充分に効率よく回せていると……

だから、社員たちは疲れなど微塵も感じさせないのかもしれない。

凜乃がそんな風に思っていると、緒方はメインフロアの脇にある通路へと進み、ドアの前で立ち止まった。

「こちらがアシスタント室で、あちらの奥のドアが社長室です。アシスタント室は、僕が一人で使っています。本間さんには申し訳ないんですけど、僕と同室を使っていたできます」

「えっ？ いいんですか？ 取引文書の翻訳を扱うと伺っていたので、翻訳に準ずる課に席を作ってくださいるものと思っていました」

「本間さんが弊社にいるのは年末までですし、社長に付いて通訳してもらう時もあるので、アシスタント室の方が都合がいいという話になったんです」

「そうだったんですね。あの、緒方さんの執務室にお邪魔することになり本当にすみません！」

凜乃が謝ると、緒方は朗らかに微笑んだ。

「とんでもない。……そうそう、仕事内容に関しては既に御社に報告済みです。どうぞ安心してください。あと、僕は所用で外出する日も多いので、本間さんを一人にさせる時間が多いと思います。そのため、今からいろいろと説明させていただきますね」

緒方はそう言って社員証でセキュリティを解除し、ドアを開けた。

アシスタント室は、落ち着きのあるダークブラウンのオフィス家具で統一されている。壁紙は淡いクリーム色で清潔感があり、絨毯はデスクなどと同様に汚れが目立たないダークブラウンだ。応接室ではないかと見紛うほど洗練されている。

「こっちが僕の席、真向かいにあるデスクが本間さんの席です」

「ありがとうございます」

デスクにはファイルが置かれており、そこには社長や緒方と共有するスケジュールアプリやセキュリティキー、就業規則、社内規定などが記されていると教えてくれた。

「今日はそちらをゆっくり確認してください。えっと、向こうには専用のコーヒーマシン、その下の戸を開けると菓子もあります。ご自由に飲食してください」

業者が週に二回補充に来てくれるらしく、社員たちは糖分を取りながら仕事に取り組めるのだという。

すっかりした福利用生に感嘆しながら、凜乃は緒方の話に耳を傾ける。しかし彼の話を聞いていくうちに、だんだんその礼儀正しい話し方が気になってきた。